「クローン病手記」濱口　卓也　24 歳

2012 年 1 月 13 日

クローン病完治への道

序)

クローン病生活 8 年で習得したことは、“敢えて他人と違う方向を向く”ことです。皆と同じ考え方や生き方をしたところで、同じようには考えられなかったし生きては来られなかった。ある意味クローン病の御蔭でしょうか？でもそんなクローン病ともお別れする日もそう遠くないと確信しております。

壱)

平成 14 年に洛南高校入学。激しい勉強漬け生活でした。そんな 1 年生の 1 月頃、37 度台の微熱・腹痛(食後 2h)・痔・便への血液の付着が始まります。
近医 4 病院ほど回るが改善せず､5 病院目での血液検査の結果で総合病院へ行くよう告げられました。天理よろず相談所にて血液検査(CRP8.6)と大腸ファイバーよりクローン病と診断され、即入院と言われたのですが…

弐)

私の大大大嫌いなものベスト 3 は？--1 位 病院--2 位 医者--3 位 グリンピース--子供の頃から決まっているのです。何せ小学 1 年生でインフルエンザ脳炎を発症し、孤独に 1 ヶ月間入院していたのですから。…勿論逃げ帰りました。ペンタサを処方されましたが、ゴミ箱へポイです。ペンタサで悪化する情報は、インターネットで得たものと記憶しております。以後は病院に行かず、高校生活を独自の食事療法で過ごしていました。“絶対にクローン病治してやる”、
この気持ちが運命への精一杯の反抗でした。K 大学工学部志望でありましたが、自分の気持ちを正当化するには医学部を目指さざるを得ない状況でした。

参)

大学受験は人生を賭けました、落ちたら働くと(N 医大医学部 1 校のみ出願)。神様の悪戯か私は合格最低点+1 点で平成 17 年度の N 医大医学部試験に合格しました。大学生活 6 年間は徐々に悪化していきましたが、医学の習得を楽しみ、また食事療法にて比較的穏やかに過ごせていました。人並に恋愛もしました。

そして平成23年度医師国家試験に無事合格。

肆)

平成23年4月、N医大付属病院へ就職し研修医1年目のスタートです。
新しい環境でストレスは嫌でも掛かります。同病院消化器内科のT先生に血液検査でのフォローをお願いし、クローン病の経過観察をしていました。
徐々にCRPの上昇を見、10月にはCRP3.3と高値を示し下痢が続くようになりました。同時期の大腸内視鏡で散在するアフタを認め、小腸造影で回盲部より80cmの範囲に潰瘍及び2個所の高度狭窄を認めるという結果でした。T先生は「最低でもペンタサを始める時期であり、狭窄に対しては研修医の間のオペを勧める」という考えでした。私自身、体の状態が発症以来で一番悪化していると感じていましたし、ペンタサ位なら飲むのも仕方無しかと流石に切羽詰っていました。

伍)

そんな最中、インターネットで“クローン病　治療”と打ち込み検索していました。松本医院がGoogleの8ページ目くらいに出てきました。実は2年前に一度見たことがあるホームページで、ふと「あっ」という運命を感じました。母親に話すと直ぐに行こうと決まりました。この時私は松本医学を信じるとか信じないとかよりも、何でもいい、何か良い打開策はあるのか？と漠然と考えていました。

陸)

平成23年11月20日の初診、松本先生は当に天才肌だと感じました。唯の天才なのではなく、先生御自身が身体的・精神的疾患と葛藤される中で努力されたからこそ、私のように切羽詰って来院したどん底の患者を一発で笑顔に出来るのだと思います。一番覚えているのは、「クローン病みたいな訳の分からん病気持ってたら、結婚もでけへんわなぁ」という言葉。普通に考えたらこれ差別用語ですけれど、私はこれを言われて嬉しかったのですよ！だって私の苦悩の一つドンピシャですからね。

私は研修医として働き始め1年経とうとしていますが、今でも病院・医者は大嫌いです。暗い・怖い・冷たいイメージしかありません。ガイドラインが全て正しいとし、ガイドラインに基づいて無心に投薬するだけ。医者にしても患者にしても、何が面白いのでしょう。病院から帰っていく患者さんは少しでも笑顔になれたのでしょうか？私は松本医院に行くのが楽しみですよ、勿論帰りはにこにこです。

漆)
　治療は漢方煎じ薬(分3,食前/食後)・お灸・漢方風呂が自宅でのメンイ治療です。加えて、ヘルペス症状のある方は抗ヘルペス薬、Albの低い方はアミノバクトの処方があります。漢方煎じ薬は異物を腸管に入れることで、お灸や漢方風呂は皮膚から刺激を入れることで免疫を上げます。漢方煎じ薬は非常に苦いですが諦めずに頑張ってみて下さい、乗り越えればきっといい方向に向かいますよ。
　もう一つの治療は「頑張らない」ことです。副腎からステロイドホルモンを盛んに出していては元も子もないですから。最近先生のお知恵を拝借して、「体にストレス掛けると良くないよ、体調悪くなるよって言うよね。でもどうして治療でステロイド出すのだろう？」と同僚研修医に問いかけてみたりしています。

捌)
　始めて一週間は症状が悪化して、水様便が増え不安でした。今思えば治療の効果と考えられます。漢方煎じ薬という異物を腸管へ投入しているので、免疫が排除しようとした結果なのでしょう。10日目頃より便は固まり、以降は一度も下痢にならず気持ちいい固形便が続いています。
　もう一つ非常に嬉しいご報告があり、松本先生に本当に感謝しております。それは食事に関してなのです。クローン病発症以来、8年程厳しく食事制限をしてきました。しかし初診時に先生は、「何食べてもいいよ～」と仰いました。正直なかなか禁忌食に踏み出せませんでしたが、便が固形化して以降少しずつ試してみようという勇気が出てきました。そして8年ぶりになるのでしょうか、菓子パン・カレーライス・オムライス・ラーメン・豚肉・牛肉・から揚げ・天ぷら・お酒等々に挑戦しました。「あれ…!?大丈夫だ」。本当に不思議なのですが、腹痛も下痢も生じないのです。正直生まれ変わった気持です。
玖)
　リバウンドに関してなのですが、飲み始めて10日間程の水様便がリバウンドだったのかと愚行しています。私はクローン病に対する投薬は8年間一切してきませんでした。投薬がなかった分、リバウンドが早かったのかもしれません。IBD専門医からすれば、珍獣ならぬ珍人でしょう。これも病院・医者嫌いの御蔭でしょうか。

拾)
　IgGからIgEへのクラススイッチが生じれば、クローン病はアレルギーへと転換し、以降は次第に原因となる化学物質と共存の方向へ向かい完治するのでしょう。漢方煎じ薬を飲み始めて約1.5か月、今までは軽かった症状で、強くな

ってきた症状があります。それは右下腹部、右鼠径部付近の腸管の中が痒いのです。皮膚には何の症状もなく、とにかく腸が痒いのです。確かに右下腹部は回腸の狭窄部があり、以前からも違和感はあったのですが、こんなに腸の中が痒く感じたことはありませんでした。狭窄症状というよりは、IgE の放出による痒みでは？と考えています。

拾壱)

平成 24 年 1 月 7 日の通院で、拾)の症状があるが、クローン病の症状は出ていないと報告しました。松本先生は「そしたら食前の煎じ薬を、アレルギー治療の煎じ薬に変えよう」と仰いました。1 月 12 日現在、依然腸が痒いですが良い方向に向かっているのではと感じています。治療途中でありますが、ご報告とさせていただきます。これを読んで下さった方々の新たな一歩を踏み出す切掛けになれば幸いです。

終)

大学生時代、クローン病に悩む中で感動した言葉。それは、Ambroise Paré の“治すこと 時々、和らげること しばしば、慰めること いつも”です。私は今でもこの言葉を読むと、自然と涙がわいてきます。まだ新たな人生の門出にある私にはこの涙はうまく表現できませんが、これこそが最高の医療であり私の求める医師像であります。「症状(病気)というものは医者が治すものではない、患者が治すものや」という松本先生の言葉には、私の求める医師像が見えている様に感じます。